The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	奈良時代の美術
Author(s)	佐々木, 恒清
Citation	懐徳. 1930, 8, p. 45-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88811
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

する者であるけれども、日本社會の變動によつて轉倒すべき者ではない。それは日本の國體は天皇と國民との君臣關係によつて、日本社會の地盤の上に立つこと、五重ノ塔の如きものであるけれども、國體の重心となれる柱は神性なる者であつて俗界に足せず。之より超越してゐるので、如何なる俗社會の變動ありても、之により國體自體が倒るゝことなきやうになつてゐるのである。（終）

奈良時代の美術

佐々木恒清

先づ始に奈良時代といふことに就て說明しておきますが、美術の上で奈良時代といふのと、歷史の上で奈良朝と申しますのと、簡單に區別があります。普通歷史で奈良朝と申しますのは、元明天皇から七代七十四年間を申します。美術の方では奈良時代と申しますと、もう少し範圍を擴張致しまして、元明天皇より六十年程遡つて、大化の新政から其の以後普通歷史で申します奈良朝の最後、光仁天皇あたりまでひつくるめて之を奈良時代と申すことになつて居ります。佛敎の傳來から、大化新政の頃までの九十年の間、ちやうど聖德太子を中心とせられる　推古天皇の時代を、推古時代とも申しますけれども、天皇陛下の御名前を呼棄てにするといふ虞れがありますので、近頃では其時代を飛鳥時代と申して居ります。つまり佛敎傳來から九十年間は飛鳥時代、大化の新政から以後ざつと百二三十年迄を奈良時代と、大體美術の方で別けて居ります。其

の奈良時代を二つに分けまして、初めの大化の新政から元明天皇の和銅の頃に至る迄、ざつと五十年の間を奈良時代の前期と申し其の頃の有名な白鳳といふ年號をとつて便宜上白鳳時代といひ、後の方は元明天皇から七代七十餘年間を天平時代、斯ういふことにわけて居ります。此處でお話申しますのは、奈良時代に就ての美術の極く大體の話で、小さいことは時間がありませんから、到底申上げて居られませんので、大體當時の美術はどんなものであつたか、どういふ精神を現はして居たかを、順序を追ふてお話申すことに致します。先づ初めに白鳳時代の大體を申上げます。

これは今からざつと千二百五十年程前のことであります。ちやうど支那では唐の太宗高宗の出られた頃であります。飛鳥時代は主として支那の南北朝の最後から隋といふ時代に亘つて居ります。其の飛鳥時代の美術と奈良時代の美術とは、殆ど眞中に一つの線を劃したやうに、はつきりとした區別がついて居ります。飛鳥時代は何となしに堅苦しい非常に強い線を使つて、まだ充分に洗練されてゐないものでこの時代の美術は今の朝鮮を通つてやつて來たのです。其朝鮮の元になるのは、支那の主として南北朝の文化です。南北朝殊に北の方の後魏の美術が朝鮮にはいつて、それから日本に來たのが、飛鳥時代の美術となつたのであります白鳳といふ時代になると、唐の時代の眼のさめるやうな立派なる文化が日本にはいつて來ました。そうして洗練された佛像形式がはいつて來たのであります。すべての線の現はし方が非常に流麗になり、美術の方から申しますと、價値の多い傑作が澤山あります。

佛像の方から段々と申上げていきますが、白鳳時代のもので今遺つて居りますものは奈良地方に多い。奈良の西ノ京の藥師寺の中に東院堂といふ堂がありまして、其の中に聖觀音があります。其の聖觀音といふ意味は、普通の觀音といふのと變りはないのです。聖といふ字を附加へたのは、觀音といつても、十一面觀音

といつだり、千手觀音といつたり、それ〳〵名前がついて居りますが、さういふやうな名前のつかない普遍的の觀音さんに、普通聖といふ字をつけるのです。其の東院堂の觀音がこの時代の傑作であります。一丈餘りの高さで、それが前の飛鳥時代の佛像と比較して非常に洗練せられたものであります。鼻の格好とか耳の格好とかに少しいたらぬ所はありますが、併し全體から見ますと、非常に胸なんかの肉づきの豊滿になつて居る所、或は腕の肉づきの良い所、或は着物の線が非常に流麗になつて、のび〳〵とした所が現はれて居ります、飛鳥時代は着物の線なんか堅苦しい所がありますが、白鳳時代になりますと、線がのび〳〵としたり波が打つてゐるやうな、見て居つても氣味のいゝものであります。さうして白鳳時代は肉體が着物を通して見ゐるやうな薄い着物を着てる所が流行つたのであります。藥師寺の觀音を見ましても、それが銅で拵へたものでありますけれども、胸から下の着物が如何にも薄い着物であつて、股のふくれた線が、其の薄い衣を通して、充分現はれて居るやうになつて居ります。さういふ傑作が千二百五十年ばかり前に出來たのであります。歴史家によつて區々の議論がありますけれども、大體は大化の少し後に出來たものであらうといふことになつて居ります。

それからもう少し後に出來たのは、法隆寺の金堂にある橘夫人厨子であります。此の橘夫人といふのは、光明皇后のお母さんであります。其の橘夫人といふ方の念持佛と昔から言ひ傳へた阿彌陀さんが、厨子の中に今でも安置されて居ります。此の阿彌陀さんは高さは二尺位ゞ、觀音勢至とかの二體が脇に立つて居られます。何れも莖のついた蓮の花の上に阿彌陀さんが坐り觀音、勢至が立つて居る三體の調和が、如何にも好くとれて居ります。肉體が着物を通して見えるやうで、面は段々と前の時代と變つて、丸々しくなり、何んとなしに少し子供らしいやうな、如何にも明るい無邪氣な佛さんになつて居ります。前の時代――聖德太子の

時代の佛像は、兎角面が長いのであります。所が白鳳時代あたりから面が非常に丸くなつて來るのであります。其の佛さんの後ろにあります衝立ての樣な飾りの銅板には、非常に流麗なる唐草模樣がありまして、工藝品としては一寸外に比べ物のないやうな綺麗なものであり、白鳳時代の傑作であります。

もう一つ此の時代の傑作は新藥師寺の香藥師であります。新藥師寺は春日神社の右の方へ四五丁ばかり行つた極く淋しい處にあります。此處に天平時代よりは古い香藥師といふ小さい佛像があります。これが如何にも子供らしい無邪氣な顏つきをした藥師さんで、やはり着物のうすい、肉體が見えるやうな佛像です。今より二十年程前に、一度新藥師寺に泥棒がはいりましたが、其の香藥師さんは僅に三尺あまりのものですから、盜まれて一時行方不明になつて、大騒ぎしたことがあります。泥棒も中に金があるかしらんと探したらしいのです。それが大阪の天王寺の草原の中に捨てゝあつたのを拾つて、又元の藥師寺に戻つて來たのであります。この佛像は又火事にも罹つたことがありますので、火事によつて多少顏色が黑くなつたやうな點がありますが、今なほ千二百五十年ばかり前の面影を充分に留めて居る傑作であります。以上の三つの彫刻が奈良時代前期の代表的なものであります。

繪畫の方では法隆寺の金堂の中に十二の壁畫がありますが、あれは法隆寺の創立當時のものでなく天智天皇の頃に、あらためて畫工が描いたものであります。なか〳〵大仕掛な繪畫で、日本ばかりでなしに少くとも東洋にあつては、まあ第一とも云ふべき立派な壁畫であります。インドのアジャンタといふ處に石窟がありまして、壁畫が遺つて居りますが、其のインドのアジャンタにある壁畫と、法隆寺の壁畫とは殆んど符節を一にするやうな點があり、アジャンタの畫を書いた畫工が、法隆寺に來て描いたのではないかといふほど能く似たものであります。前の飛鳥時代の佛さんは、大體線がきついものですから、現はして居る所は嚴格

な態度を執つて居ます。まるで直立の姿勢を執つて居るやうな形が多いのです。所が白鳳時代は脇立ちの佛さんなどは、まるで體操の休めの態度であります。さういふやうな自由な態度を執つて居ります。前の堅苦しいのが段々と柔かみを帶びて來たのであります。殊に法隆寺の金堂の西方の壁にある阿彌陀さんと、觀音勢至などの線ののび〳〵した所は、或は體の姿勢が如何にも自由な所は、此の白鳳の時代を通じての態度を現はして居ります。

其の次に建築で有名なるものが遺つて居ります。これは先程申しました藥師寺の東の塔であります。形は外から見ますと六重の形をして居ります。屋根が六つ出て居ります。これは構造の方から考へますと、三重の塔でありますが、上の屋根と其の次に出て居る屋根との間に、全くの關係のない屋根を一つづゝ飾りとしてつけたのであります。それは全く内部の構造に關係がなく、構造の上から見ますと全く三重の塔であります。西の塔は火災に罹つて今は礎石が遺つて居るだけであります。

此の藥師寺の塔で美術家が賞讃する點は、大きな屋根が三つあり、其の間に小さい屋根を裝飾として居りますので大きい屋根と小さい屋根が交互に出ておつて、それを松林の間から見た所は、何とも言へない調和した立派なる格好であります。一體飛鳥時代から平安時代迄は、建築の屋根の勾配を非常に緩かにしたものであります。それから屋根から上に出た九輪も長く、よく言ふ平凡な言葉でありますが、あの「建築は凍れる音樂なり」と云ふ言葉が此塔によゝあてはまるのです。或る一つの音が高く低く巧に奏でゝ居るやうな感が此の塔の格好によく現はれて居ります。

要するに奈良時代の前期即白鳳時代は嚴寒漸く去つて梅も咲き出し野山の景色がだん〳〵春めいて來た時に當ります。次の天平時代は櫻花爛漫、野原の景色が何んとも言へないと云ふ麗はしい時であります。次に

この天平時代の美術を申上げます。

天平時代は支那の唐の文學美術なんかの非常に盛んになつた玄宗皇帝の時代に當ります。其の時分盛に唐との交通があり、佛教は日本では前古未曾有の隆盛を極めたのであります。之は東大寺のやうなあんな大きな寺を建てたことを見てもわかるのであります。此の東大寺に於て天平時代のものを窺ふべき立派な材料は奈良の水取りをやります二月堂の少し下の三月堂と云ふ堂に就て見ることが出來ます。正しくは法華堂と云ふのであります。それが天平時代の建築なり彫刻の方では、見逃してはならんものであります。

佛像の方で申しますと、此の三月堂の本尊として一丈二尺ばかりの不空羂索觀音と云ふ觀音さんが立つて居られますが、其の觀音さんの作り方は奈良時代に盛んに用ゐられた乾漆といふもので作つたものであります。乾漆にも色々種類がありますが、その内の木心乾漆と云ふものは、佛さんの形を木で拵へて、其の上を布で張つて、其の上へ抹香と漆を混じたものを塗つて、佛さんの形を仕上げるのです。三月堂にある乾漆のやり方は、脱乾漆といふやり方で、これは土で大體佛さんの形を拵へて、其處へ布を張つて、其の布の上へ更に抹香と漆を混じたものを塗るのです。それで十分乾いた所で、脚は脚、手は手に切りはなして了つて、中の土で拵へた心を抜き取つて了ふのです。さうすると張子のやうな物が出來ます。其の張子を又繋ぎ合はすのですが、其の合はす時に、中へ縦横に心棒を突張つて形の頽れない樣にします。此の一丈二尺ばかりの脱乾漆で拵へた佛さんは三目八臂と申しまして、手は左右に四本づゝ、目は横に二つ縦に一つ合せて三つあります。それが決して奇怪なものでなく、なか〳〵莊嚴な有樣を現はして居ります。此の佛像に於て特に見るべきものはその冠で、これは直徑一尺五寸ばかりのものでありますが、全部銀で拵へたもので唐草模樣でうまく冠の形を作り、更に其の冠の正面に丁度八寸ばかりの銀の佛像が裝飾について居ります。其の全體の

唐草模様の冠には七つ八つの鏡がまた裝飾としてついて居ります。其他種々の玉を以てちりばめて居ります關野博士の調査によりますと、玉の數は二萬以上もあつたと云ふことです。つまり瑪瑙とか琥珀類、水晶、今の硝子或は南京玉と云ふやうな、色々の種類の玉で全部飾りをしてあるのです。これは工藝美術としても日本に於ける最も有名なるものであらうと思ひます。

それから本尊の左の方に日光、月光と云ふ佛さんがありますが、之は塑像で、上から彩色したものです。美術史家の口を極めて賞讃するものは、本尊の向つて左に居られる月光菩薩であつて、之は高さ僅か八尺ばかりの立つてる姿で、高山樗牛を初めとして日本の美術史の研究者は、誰一人として賞讃せないものはないと云ふやうなものであります。世界の美術で一番名高いのはギリシャの彫刻でありますが、そのギリシャのものもこれ以上に出ないだらうと云ふ程のものであります。髪は無造作に上の方に束ねて、全く無心の姿で遙か前方を見て居られるのです。所がその合掌の姿が如何にも自然に巧妙に出來で居るのであります。これは作者は判りませんけれども、天平時代の人が佛像を作る時の敬虔なる心もちがよく現はれて居るものであります。即當時佛工或は高僧などの佛像を作る時の態度は熱烈なる信仰と眞劍の態度とをとつたものであります。そして人間の心が最清らかに最正しい時はどう云ふ時であるかと云ふと、それは合掌の時である。自分が今まで惡いことをして、隨分世間に對して迷惑を與へたやうなこと、或は自分自ら罪を犯したと云ふことがあつても、佛なら佛に對して、罪を悔ひ改めやうと云ふ時に、合掌して、佛を念ずると云ふ時に、如何にも人間は清らかなものになると考へたものです。其の一瞬間の心持は、全く今までの罪を忘れた敬虔なものですが其の心が、日光、月光の形になつてよく表はれて居ります。その合掌の姿が全く自然の形として現はして居ります。即此の日光、月光の合掌の下の方が少しあけてあるのです。掌の下の部分が互にひつつか

ずに態とあけてあるのです。其のあけて居るのが如何にも合掌の自然の姿であると思ふのであります。さうして其の面をぢつと見て居りますと、崇高とか或は典雅とかの想をするやうな、極く人間離れをした佛像で男とか女とか云ふ區別なしに、佛と云ふ心持を巧に表はしたものであります。

それからもう一つ三月堂で名高いことは、斯う云ふ名前がついて居ります。執金剛と云ふのです。これは昔から寺では一寸人に見せない秘佛として居ります。これは仁王さんのやうに、一間ばかりの高さのもので腕を握り締めて口をあいて大喝してるやうな態度をして居ります。其の胸なんかの男性的に廣く張つて、腹の所でぐつと締めたと云ふやうな所、其處が寫實の妙を極めて居るのです。只今でも色彩なんかゞよく殘つて居つて、天平時代の勇ましい佛像の唯一の傑作となつて居ります。

それによく似たものは同じく東大寺の戒壇院と云ふ所に四天王があります。それも天平時代の勇ましい佛像の例となつて、やかましいものであります。此の戒壇院の四天王と云ふものは天平時代の美術に就ての本を見ますと、必ず何か書いてある位の有名なるもので、その鎧は皮で出來たもので、其の樣式は支那や朝鮮のものでなく、もう少し西方のものであります。恐らくは中央アジヤ地方の樣式を表はしたものであらうと思はれます。それは天平時代には遠く中アジヤのものも傳はつて居ると云ふことが證明されるのであります金物が皮の上に締められた時にこんな風になるとか、皮と肉とがこんな風になるとか云ふ所まで非常に注意して、寫實的に非常に巧に出來て居ります。

後の鎌倉時代になると餘り勇ましい形に囚はれて、一寸いやな點がありますれけども、此の奈良時代のものは寫實一點張ぢやないのです(圖を指し示す)こちらの方の拓本は奈良の春日の山の中にある巖窟の中の石に彫りつけた佛像であります。こちらの方は大佛殿の前の燈籠の火袋の所に彫りつけた天人の姿であります。

線の流麗、姿の豐麗と云ふやうな所がよく彫りつけてあります。後の佛像では斯う云ふやうな大陸的の佛像はありません。天平時代のものはよく大陸的の雄大なる精神を現はして居ります。

建築に就て申上げますが、此時分の建築は、一番大きなものは勿論東大寺の大佛殿であります。所が平重衡や松永久秀の爲に燒かれたのであります。併し天平時代の形は幾分か遺つて居ります。即ち大佛の下腹部及び蓮瓣の一部等でありますが、當時は此の宇宙全體は蓮華藏世界であつて、一つの蓮瓣に、百億の國があると云ふやうな考へ方をして居ります。其の百億の國の一つづゝに釋迦が現はれて說法をして居ると云ふやうな考へ方であります。あゝいふ大きなものを十年程かゝつて、延人員にしますと五十萬人以上と云ふやうな人の力で、此の大佛が出來たのであります。塔はもと東の方に一つ、西の方に一つと東西對立したものがありました。これも記錄で高さ三百二十尺ばかりと云ふことが、大體判つて居ります。奈良美代の建築にちやんと一つの規則がありまして、金堂の飾りになるべき塔は、金堂の大體二倍にするのです。金堂は大佛殿であります。百六十尺であります。それで三百二十尺と云ふ塔の高さが出て來ます。それが右と左にあつたのです。只今は土壇だけが遺つて居りますが、昔は輪奐の美を極めた大伽藍であつたのです。これは聖武天皇がもの好きでお拵へになつたのでなく、國家の安泰萬民の幸福を祈る爲に建られたるもので、天皇の大御心が斯う云ふ風になつて現はれたのであります。御一人の迷信とか或は斯う云ふものを建てたら面白いとか云ふ樣な氣分でなくして、國家の安泰と云ふことが第一の眼目になつたのであります。

其の以外では唐招提寺と云ふ寺であります。唐の坊さんで鑑眞と云ふ人が來て建てたのであります。これはゆつたりとした屋根の傾斜のゆるやかな點、柱の大まかな點、軒の組物の何んとなしにきび〳〵とした男らしい點は、よく天平時代を現はして居ります。

繪畫の方では餘りに立派なものは遺つて居りません。只奈良の博物館にある藥師寺の吉祥天と云ふ比較的小さなもの、或は大佛の蓮瓣に彫りつけたもの、正倉院に小さなものはありますけれども、餘りに立派な大作は遺つて居りません。

兎に角奈良時代を白鳳と天平と大體二つに分けて、極く概略にお話を致しましたが、それでは大體其の時分の美術には、どういふ特色があるかと申しますと、第一は大陸的雄大の精神がよく現はれて居ると云ふ點です。これは佛像一つ見てもよく判るのです。其の表はして居る態度が非常に充實しまして、決して貧弱でないのです。此の天平時代の佛像の面を見ますと顏面の線の具合が、如何にも彈力があります。風船玉に空氣を詰めて、少し押せば後へ戻つて來るやうな彈力に富んで居ります。天平時代は此の彈力のあるのが大なる特色であります。第二は形と精神が如何にもよく調和が取れて居ることです。これが調和が取れて居らぬとついまづいものになるのです。飛鳥時代は精神はなか〳〵うまくやつて居りますけれども、形の調和が惡いのです。それで非常に面の長い胸なんかゞ非常に細くなつたり、或は面ばかり大きくなつて居るのです。それから奈良時代以後殊に藤原時代になりますと、これは形はなか〳〵よく出來て居ります。宇治の鳳凰堂の本尊さんが其の適例です。精神が、形が整うて居る程現はれて居ないのです。佛さんとしては餘り柔か味があり過ぎるのです。鎌倉時代になると、餘り柔か味がなくて勇ましい所があり過ぎて、精神が伴はないものが澤山あります。佛像として精神の表はし方がまづいので、何んとなしに騷がしいのです。これは建築でもさう云ふ嫌ひがありますが、奈良時代は極めて靜穩な安定性があります。雄大なる精神が溢れて居り、何んとなしに安靜な感じがしますけれども、鎌倉時代及其の以後になりますと、兎角裝飾があり過ぎて俗惡とか云ふやうになるのです。殊に德川時代になると日光廟とか大阪の天王寺の建物等の如き裝飾を弄すること

甚しく、餘りにごて〳〵して居ります。奈良時代は餘りさう云ふごて〳〵した所は使はなかつたのであります。

もう一つ奈良時代は非常に自由な朗かな氣分の現はれて居ることです。これは後の時代と比較すると判りますが、此の時代の宗派が然らしめたのであります。華嚴宗とか法相宗とかゞ然らしめたのです。此の宗派は餘り秘密を尊ばないのです。平安朝になると密敎の分子が非常に多くなり、餘り佛さんを見せず、內陣とか外陣とかの仕切りを嚴重にして、中は眞暗な所が多い。それは只今河內の觀心寺が眞言宗ですが、あそこは斯う云ふ點があります。

この自由な朗らかなる點は一方から申しますと、天平時代の心持がよく表はれて居るのです。天平時代の人々は非常に悲觀して居らないのです。此の世は非常に樂しいとか、非常に現世に滿足して居るのです。極く樂觀的の態度で觀て居たのであります。

兎に角奈良時代は非常に唐と交通の頻繁な時で、遣唐使が非常に澤山出たのであります。留學生は只今のやうに二年や三年洋行して來ると云ふことでなく長いのであります。長いのは三十年、普通は二十年乃至二十五年位留學するのです。兎に角二十年程勉强しに行つて、直接唐の文明に接觸して來るのです。それが多い時には二百人も三百人も行くのです。それが唐の人が來たり朝鮮の人が來たり中にはインドの人が來たり盛んに奈良の都の方に、外國人がごし〳〵入込んだのです。其の結果あれだけの天平の美術が出來たものであらうと思ふのであります。

唐は當時インドと中央アジヤとも交通して居ります。其等の文明の日本へはいつて來るのを、よく日本ものと調和しながら採つて居ります。其處は日本の人のえらい所で、唐の文明を直譯的に採るのでなしに、餘

程日本の國體を考へながら取捨して居るのです。其の點は美術の方面にもよく現はれて居ります。さうして日本の國を忘れぬと云ふ態度がわらかつたのです。色々當時支那だけのものでなしに、中央アジヤ、ギリシヤ、ローマ邊りのものが奈良朝にはいつて來て、色々の工藝品になつたり、色々の形になつたりしたことは正倉院邊りのものを見ればよく判るのでありますが、今は詳細に述べる時間がありません。甚だ蕪雜なことを申しましたが之で私の話は終ることに致します。

雲林院の研究（承前）

湘園音代節雄

第六章　雲林院の位置

紫野—船岡山の東北—諸書の記事—寺地大德寺に編入

紫の雲の林とは即ち紫野の雲林院の謂である。雲林院が紫野にあつたことは疑ふ餘地がない程明白であるしかして雲林院の位置が、船岡山の東であつたことも疑がない。山城名勝志及雍州府志に、大德寺の東南とあり、また國史に、船岡山の東北とあるから、現在の小堂は昔の寺地の一部分と見て差支へない。しかも名勝志に菩提講の舊跡が大德寺境内にあるといひ、大德寺長老妙超の菩提講東塔中北寄二十丈受文及後醍醐天皇編者並に榮雅抄の記事を綜合しておぼろげながら其寺地の區域を察することが出來る。